

---

act 3 **夢幻の願い、偽りの微笑**

望月満

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

act 3 夢幻の願い、偽りの微笑

### 【Nコード】

N7131P

### 【作者名】

望月満

### 【あらすじ】

「act 1 春の宵、桜の都」(<http://ncode.syosetu.com/n4037i/>) 「act 2 夜半の月、砂上の旅」(<http://ncode.syosetu.com/n6488p/>)

「」の続編。 空に浮かぶ不思議な空間に住む国王の子供であるナユタは、元メイドの友人リスカとともに、現在の王である兄の存在を気にしながら生活していた。そんな二人はとある祭りが開催されたある日、不思議な容姿をした幼い少年と少女に出会う。己の人

生を大きく揺るがされた二人が下した決断は……。砂漠の薔薇を巡る物語・第三弾。

## scene 1 (前書き)

お久しぶりです。

まだ執筆はあまり進んでおりませんが、そろそろ投稿しなければと  
思い、

こうしてact 3の第一話目を書きました。

最近はなかなか執筆の手が進まず、大変苦労しています；

蝸牛も呆れるほどのノロマ更新になるかもしれませんが、  
どうかよろしくお願いいたします。

s c e n e 1

誰かと出会うこと。誰かと別れること。

それはどちらも、運命である

\*

\*

\*

雫が、美麗に舞った。

水の雫は蜜色の大きな満月の光を受けて反射し、光の粒子となつて宙を飛ぶ。

たくさん光の粒は虚空に滑らかな放物線を描きながら、自分たちがもといいた場所 広大な湖へと落下する。湖は落ちて来た雫を己の中に吸い込み、雫は静かに湖へと波紋を広げていく。

「……水は、本当に綺麗だ」

湖のほとり。そこでふいに上がったのは、少年のような声だった。あどけなさを残すその声は、しかし子供らしくもない静かで儂げな雰囲気醸し出している。

月明かりの下。湖のふちに腰かけている声の主は、細身の人物だった。美しい白群色びやくんいろをしたタートルネックのシャツと、紺色の細身のパンツを身に纏っている。短い髪は、闇の中でさえ鮮やかな色を放つ赤色。瞳の色は 不明。何故ならその人物が、ベージュ色のキャスケットを目深にかぶっているからだ。キャスケットの鏢つばの上には、青灰色せいかいしよくの縁をしたゴーグルがのせられている。

「いいよな。本当に。水は、一点の濁りもなく……この世の穢れなんて、全然知らずに、ただ輝き続ける」

キャスケットをかぶっている人物は、水につけている自分の両足の先に視線を落とす。そのまま右足だけを水上に振り上げ、澄んだ

水の割れる音を立てながら、再び宙に細かな光を作り上げた。煌めく水しぶきは派手に上まで飛び、その動きを追うようにしてキヤスケットの人物の顔も跳ね上がる。その瞬間に、神秘的な深い紫色の瞳が蜜色の光のもとに晒された。

「やっぱり。ナユタ、またここにいたの？ 今何時だと思ってるのよ？」

唐突に、澄んだ声がその場に響き渡る。

声に反応したキヤスケットの人物は、さして驚く風でもなく栗から視線を離し、肩越しに葡萄色の瞳を声の方向へゆるりと向けた。

「リスカか。どうしたんだ？ 一体こんな時間に？」

キヤスケットの人物から数メートル離れた場所。そこに、一人の少女が立っていた。

「それはこっちの台詞なんですけど。まったく。あなたの家に行ったら、明りもついてなかったし中にいる気配もなかったから、まさかと思つて来てみたの」

「そっか。心配かけたな。ごめん」

素直に謝罪の言葉を述べたキヤスケットの人物　ナユタの反応に、澄んだ声の人物　リスカは桜色の長い髪を揺らしながら、視線をそらすようにしてそっぽを向いた。

「そうに決まつてるでしょ。もう、ナユタは……」

薄い生地の白いフレアワンピースを纏った色白の肌と、髪と同色の瞳を持つすねたような表情のリスカを見つめながら、ナユタは憂いを帯びた顔で小さく口元を微笑ませた。

「昔からそうだったな。オレはリスカに心配ばかりかけて」

「その度に、あたしはナユタを叱ってる。それも大声で」

「保護者かよ。けど、オレが逆にリスカを叱ったことって、ないよな」

「そうよ。だって、あたしは誰かさんと違って良い子なんだからね」  
クスクスツとリスカは自分の発言に、軽やかな笑い声を上げた。

ナユタはそんなリスカの楽しそうな表情を、やはり憂いを帯びた顔

で、瞳で、うつすらと作り笑いを浮かべながら見つめる。

「そうだな。リスカは良い子だもんな。明るくて、優しくて、こんな？暗黒時代？にも笑い顔を絶やさなくて。本当に、良い子だよ」「褒めてくださり、誠にありがとうございます」

リスカは恭しい動きでわざとらしく腰を折り、ナユタへお辞儀をした。ナユタはそんな言葉を発し、大仰に腰を折ったリスカにやはり憂いているかのような笑みを向ける。

「そういうからかいは、止めた方がいいと思うぞ」

「あははっ。そーだね」

リスカは楽しげに笑い、ナユタの方へと一歩近寄った。ワンピースの裾が揺れ、リスカの白く細い足を滑らかに撫でる。良く見ると、その足には何も履いていない。

「リスカは、時々イジ悪になるよな」

「その通り。良く分かってるじゃない」

クツクツとリスカは口元を手で押さええて悪戯っぽく笑い、肩を小刻みに震わせた。淡い桜色の光を放つ腰まで届くほど長い髪が、微かなびく。発光するかのように白い素足は？柔らかで真っ白な？地面を踏みしめる。

ナユタのそばまで歩んだリスカは、ふいに首をかしげながら美しく微笑んだ。

s c e n e 2

美麗な表情を僅かも崩さないまま、リスカは口から言葉をこぼす。

「ナユタ。あなただって、イジわるよ」

「は？」

リスカの思いがけない言葉に、ナユタは首をかしげて「どういうことだよ？」と立て続けに問おうとした。がその時。

ふいに、リスカが腰を折り曲げ、白く細長い腕をナユタの顔へと伸ばした。そのまま滑らかな手の平はナユタの頬を撫で、そして、

「ッ！」

「ほら」

リスカはクスツと子供っぽく笑いながら、ナユタの左頬をつまんでそのまま上へと引き上げる。結果的に、ナユタの顔には歪な笑みが作り上げられることとなった。

「なっ。何するんだよッ」

口の左端が上がっているため、ナユタの発言は少々聞き取りにくくなっていったが、かろうじて意味を持つ言葉となっていた。

歪な笑みの中、困惑と小さな怒りに顔をしかめるナユタを見ながら、リスカは口元に小さな微笑みを浮かべて言う。

「だって、ナユタは意地悪なんだもの。暗黒時代になってから、全く笑わなくなっただじゃない。まあ……無理もないかもしれないけど、でも、あたしは、ナユタに笑っていてほしいし、あたしは、ナユタを昔みたいに無邪気に笑えるようにしたいの。でも、全然、ナユタは笑ってくれない。だから、これは罰よ。それから、笑う練習も兼ねてる」

柔らかな、大輪の花を思わせるリスカの笑み。リスカはナユタの頬から手を離すと、ナユタの視線に合わせるようにして笑顔のまま、その場にしゃがみこんだ。



ナユタに笑ってもらうために、自分は笑っていようと努めている、優しさを含んだ笑顔。だが、

「……そうだよな。でも　ごめん。オレは、無邪気な笑い方なんて、もう、忘れたから」

リスカの笑みに、ナユタが応えることはなかった。

悲しみに視線を伏せるナユタは、暗い声音のまま続ける。

「もう、今のオレは、偽りの笑みを顔に貼り付けることくらいでしか、笑うことなんてできない」

「ナユタ……」

リスカの顔から、先ほどまで浮かんでいた笑みが消える。代わりに浮かぶのは、胸をかきむしりたくなるほど悲痛な表情。

ナユタは、深い悲しみの色で満たされた紫色の瞳をさらに暗く染める。

二人の間に虚しい沈黙が流れるかと思いきや、表情を曇らせたままのリスカがすぐに口を開いた。

「　　やっぱり、まだ悲しい……？　その……」

その先の言葉を言い辛そうに濁したリスカは、下から見上げるような視線で遠慮がちにナユタを見つめる。

「両親が殺されたこと、だろ」

ナユタは顔色一つ変えないまま、何の躊躇いもなくその言葉を口にした。あまりにきっぱりとした言葉に、リスカは少したじろく。

「あ、うん……。そう。　ごめん」

「なんでリスカが謝るんだよ」

「え。だって、その、ナユタに、イヤなこと、思い出させちゃったから……」

「いいって。リスカは何も悪くない。悪いのは、全部兄貴なんだから。オレが笑えなくなったのも、そのせいだし。今でも、父様と母様を殺した兄貴を見るたびに、心の中で、破壊衝動が疼いて」

「ナユタ！」

リスカは鋭い声でナユタの言葉を遮るように叱咤する。その声の

あまりの鋭さに、ナユタは驚いて顔をはね上げた。色白の顔の中で暗い影を漂わせる、二つの紫の瞳が驚きに大きく見開かれる。

しばらくリスカは緊張した面持ちで息をひそめるようにして座っていたが、ふいにその瞳に陰りを落とした。

「ごめんなさい。……でも、もしさっきの言葉が、あなたのお兄さんに盗聴されたいたら、あなたは叛逆罪で即死刑になるかもしれないって思ってた……」

「盗聴？ いくら何でも、それは考え過ぎ」

「そんな、呑気なことっていられるの？」

リスカの力強い声音に、ナユタは僅かに戸惑う。

「え、あ。ああ。確かに、兄貴ならそれくらいのことしててもおかしくはないけど……」

ナユタは考え込むように、視線をリスカから下へ下げる。

「それにあなたのお兄さんは、この国の王なんだからどんなにお兄さんが悪くても、あなたは刃向かうことなんてできないし、しちやいけないことなのよ」

「うん……」

ナユタは納得のできないような顔で地面を凝視していた。

scene 3

一時の沈黙の後、瞳を伏せたままのナユタがふいに言葉を零す。

「あの日オレを殺さなかつたってことは、兄貴は、オレを甘く見てるんだよな……？」

一瞬にしてかき消えてしまいそうなほど小さなその声は、しかししっかりとリスカの耳に届いていた。

「それは、そうかもしれないわ。けれど、だからと言って無茶なことではないですよ？ あなたの本当の力を知ったら、王はあなたのお兄さんは、あなたに何をするか分からないわ」

辛そうに眉をひそめながら吐き出したリスカの言葉に対し、ナユタはまるで何かに怯えるように身体を小さく震わせた。そのままため息とともに瞼を閉ざし、唇を強く噛む。

「心配させて、ごめん。リスカには関係ないのに、オレはお前を巻き込んでしまった。本当、ごめん」

「ナユタ。……バツカじゃないの」

ふいに芯の強い声音がナユタの耳朶を打つ。思いがけないリスカの言葉に、ナユタは閉じていた瞳を驚きに見開き、リスカの瞳へ吸い込まれるように視線を向けた。

「何勝手に謝ってんのよ！ あたしは好きでナユタと一緒にいるの。それに、ナユタは何も悪くないじゃない。だから、謝ったりしないでよねッ」

リスカはむつと眉を釣り上げ、ナユタの瞳を睨むようにして見つめ返した。ナユタは呆然としたような表情でリスカを見つめ、ふいに瞳を細めた。

「……本当。昔から思ってたんだけどさ。リスカって強いよな」

「当たり前でしょう。根性がないと城での侍女メイドの仕事なんて出来やしないわ。……あの頃はあの頃で楽しかったけど、王家のナユタとはこういう風に自由に会えなかつたから、今も今で幸せよ」

リスカは満面の笑みでナユタを見つめる。ナユタは微かに唇を上へと上げ、小さく首を上下に動かした。

「そうかもしれないな」

その葡萄酒色の瞳は深い悲しみに歪んだままだったが、表情は涼やかに見える。

アメジストのような瞳は、金色きんじきに輝く月を仰ぐ。明るい月に照らされてなお、その瞳は影を帯びたままだ。

「ねえ、ナユタ。絶対に、死なないでね」

「え？」

蜜色の煌めきを放つ月へ向けていた視線を落とし、ナユタはリスカを向いた。

きよとんとした表情のナユタは、儚げに揺れる水面の月を見つめるリスカに問いかける。

「どうしたんだよ、いきなり」

「……ううん。何でもない。少し、不安になったただだから」

「そう、か……？」

納得のいかないような表情のまま、ナユタは傾げた首を前方へ倒した。

水面に映る月のように幻想的な光を宿したりリスカの目を見つめながら、励ますようにして空元気な声をナユタは上げる。

「オレなら大丈夫だって。いざとなれば、力を使っつて手もあるし、自分の身くらい自分で守れる。それに、兄貴も昔ほどオレに気を配つたりしてないみたいだしな」

ナユタの声にリスカは微かに頷き、顔に笑みを貼り付けた。

「そう。……そっか。そうよね。ナユタが大丈夫って言うんですもの。あたしは、その言葉を信じるわ」

ふいにリスカは瞼を下ろす。僅かな間の後、自然な動きで瞼を上げたリスカの顔には、いつも通りの笑みが浮かんでいた。彼女の揺れた肩にかかっていた薄紅色の髪が腰の方へとこぼれる。

「ありがとう。オレを信じてくれて」

「うん。信じるわ。信じるけど……」

「けど……？ 何？」

リスカは困ったように笑いながら、視線を水につけたままのナユタの足へと落とし、それから視線の先を指さした。

「いつ言おうか迷ってたんだけど、そろそろ水から足上げた方がいいと思うよ。かなり足が冷えてると思うんだけど……？」

リスカの心配げな声と同時に、ナユタの小さな悲鳴が上がる。その高い声音は大きな満月を浮かべた真つ暗な虚空に、高く高く響き渡った。

scene 4 (前書き)

ごめんなさい；

全然投稿できていませんね；

タイピング練習も兼ねて小説を書かなければならないのですが、

最近はこの事に意識が向いてしまって、どうも書く手が進みません；

読者の皆様には、多大なご迷惑をおかけしております、、、

scene 4

\* \* \*

太陽が東の低い位置で静かな光を放つ朝。空は抜けるように蒼く、どこまでも果てしなく広がる。

そんな空に浮かぶ白く柔らかな地面　雲の上に建ち並ぶのは、シンプルな作りをした一階建ての家々。その家に住むのは、一見人間と同じ姿をしているが、人間ではない別の者たち。

『我が天空の王国は、長きにわたり神々と等しき日々を送り……』  
清々しい空気に満たされた朝。その何やら宗教めいた放送は、建ち並ぶ簡素な家の間に立つ一本の棒の上から流れていた。そこには巨大な拡声器が取り付けられており、大変迷惑な大音量の声はそこから家々へ向けて発つされている。

「ん……。ふあ」

快晴の元。一部屋しかないとある家の中にある、たくさんの布団や枕などを寄せ集めて作ったベッドのようなものの上で、ナユタはゆるりと目を覚ました。ナユタが目を開けた理由は、無論放送が耳に入ってきたからである。

小さな木のテーブルや棚などがならんだ部屋の中。ベッドの上には観音開きの窓があり、半分ほど開かれたそこからは清涼とした朝の空気と、心地よく身体を包み込む朝日が室内へと滑りこんでいた。それとともに、怪しげな放送も流れ込んでいたのだが。

「なんてことだ。？放送？で起きるなんて、寝覚めが悪いにもほどがある」

ベッドの上に寝転んだままのナユタは、苦虫を噛み潰したかのよ

うな顔で大きなため息をついた。

「……雲海に住む者として我らは誇りを抱き、地上を醜く這いつくばる人間と同類でないことに感謝をしなければならぬ。我らは神と同じ。人間は神の創造物でしかなく、……」

相変わらず、放送は続く。拡声器から流れる声は若く、張りがあ  
る良い声質をしている。しかし、感情がないような淡々とした喋り  
方で放送の言葉は紡がれていた。

「……くっだらぬ」

ナユタは仰向けに寝転んだまま、放送をふんと鼻で嘲笑った。そ  
の顔は、軽蔑や嫌悪や憎悪などといった負の感情から、醜いほどに  
歪められていた。

歪んだ顔のナユタはぼんやりと天井を見上げながら、やがて腹に  
力を込め腹筋を使ってベッドから上半身を起こした。方々（ほうほう）  
う）に散らばっている艶のある栗毛の先が、力なく揺れる。

「兄貴は、何故そこまで人間を嫌うんだ？」

「……人間は穢れの塊。見よ、西方に広がる瓦礫の国を。百二十年  
前、人間は西方の国を攻撃し、国を一瞬にして瓦礫に変えてしまっ  
た。人間は非情で冷血で無慈悲な生き物だ。それに比べ、我ら雲の  
上の者は……」

ナユタの問いに答えるかのようなタイミングで、放送をしている  
人物 この国の王であるナユタの兄は言った。

？放送？とは、この国中で毎日ラジオや道に設置された拡声器か  
ら流れる国王の言葉のことである。言葉とは言っても、放送される  
内容は毎日同じだ。その内容は、いかに自分たちの種族が崇高か、  
いかに人間が邪で醜い生き物かを訴えるものだ。

「……兄貴が思うほど、人間って醜いのか？」

ナユタは放送を聞く度に己の心の中に芽生える疑問を、ほろりと  
唇の間からこぼした。そのまま、僅かに開いた唇から室内の空気を  
吸い込むと、まるで首の据わらない赤ん坊のように首を後ろへ力な  
く倒した。その首を右側に向け、視界に僅かに開いた観音開きの窓



を入れる。ナユタは視線の先にある窓へ手を伸ばすと、そのまま窓を全開に開いた。眩しい朝日が薄暗い室内へ一気に流れ込み、新鮮な少し冷たい空気が室内を満たす。同時に太陽に照らされたナユタの顔にはつきりとした陰影が生まれ、神秘的な憂いを帯びた美しい瞳が紫の光を放つ。

「今日も、空は綺麗だな」

言葉を一つ一つ噛み締めるように呟いたナユタは、物憂げな視線を蒼穹から下げた。

「オレは　この美しい国をこんな風にした兄貴の方が、人間よりよほど醜いように思えるんだけどな」

ナユタの視界に広がる石造りの街並み。家は簡素ながらも並びが整っており、美しい風景と言えよう。しかし、市場や床から起きた者たちの声により活気に満ちる朝だというのに、外で動く人影が全くない。まるで、この街には誰もいないかのよう。

ナユタは緩慢な動きで窓のふちに頬杖をつき、不気味な静寂に満ちた街を焦点の定まらない瞳でぼんやりと眺めていた。

静寂に満たされた街の中にひときわ大きく響く、宗教的放送。その放送を受け流しながら、ナユタは窓辺でぼんやりと思案に暮れていた。紫の瞳は正面を静かに見すえ、しかし街の景色が脳で認識されることはない。

『……本日も、崇高なる我が国のより一層の発展と、この国に住まう者たちのゆるぎなき王への忠誠心を祈念し、終わるとする』

やがて、仰々しい言葉によって放送は締めくくられた。しかし尚もナユタは目の焦点を結びはず、瞳を呆然と正面に向けたまま思案を続けていた。

唐突に音が途絶えた街に、ひどく重たい沈黙がのしかかる。相変わらず人々は活動をしようとはしない。

と、その時。

ピチュルルルッ

「……うわっ。え？」

ふいにナユタが頬杖を突く窓辺に、一羽の小鳥がふわと舞い降りた。独特な美しい黄色と橙色をした、羽と尾の長い小鳥だ。まるで歌っているかのようなそのさえずりは、聞く者の心を癒すかのように柔らかい。

ナユタは街の風景からそばに止まった一羽の小鳥へと視線を下げ、小さく息をつきながら口を開いた。

「なんだ、小鳥か。どうした？ お前も一人か？」

ピチュチュチュッ

小鳥は肯定するかのように小さくも俊敏な動きで首を傾け、高くさえずる。その円らかな瞳がナユタの瞳をとらえ、純粹な光をたたえた小鳥の目に、ナユタは一瞬息をのむ。

「あ。お前。オレと同じ色の瞳してるんだな」

光の入った小さな目は、ナユタと同じ神秘的な紫色。小鳥はナユ

夕の言葉の意味が理解できないという風に、小さく首を横に傾げる。その小さな可愛らしい動きに、ナユタはすっと目を細める。その仕草は、目じりをすばませて微笑んでいるようにも、ただ単にもっとはつきりと見るために目を細めたようにも見えるものだった。

ナユタは目を細めたまま、苦笑するように小さな息をもらす。その表情が決して晴れることはないが、少しだけ憂いが和らいだように見えた。

「……お前よく逃げないよな。人懐こいのか？」

「そうじゃないわよ。あなたがあまりに可哀そうな顔してるから、逃げるに逃げられないだけに決まってるでしょ」

紫の瞳をした小鳥は、咎めるかのような口調でそう言った 訳もなく。

「はっ……？ え、ああ。リスカ？」

チルルルルッ

ナユタの視線が小鳥から声の方へと素早く上がり、刹那に小鳥は歌うようなかん高いさえずりを響かせながら天空へと飛び去る。

明るい光のかたまりのような小鳥の姿を目で追いながら、リスカはナユタの家の壁の影から姿を現した。

「もちろん私よ。小鳥に話しかけてるあなたの図って、悲しすぎるわよ？」

空高くへと舞い上がった鳥から目を離れたリスカは、薄紅色の瞳を悪戯っぽく煌めかせながら己を見つめるナユタの瞳を見返す。

「悲しすぎる図ですいませんね。……で、何？」

「で、何？ はないでしょ。せめてもう少し口調を和らげたら？」

「じゃあ、こんな朝早くから、何しに来たんだよ？」

ナユタはやれやれという風に肩をすくめ、面倒くさそうに小さく吐息をついた。しかしその声音には、仕草ほどの面倒くさいという感情はなかった。

リスカはにつこりと可憐な花のように笑い、ナユタの方へと窓越しに身を乗り出す。反対に、窓辺で頼杖をつき外へと身を乗り出す

ような体勢になっていたナユタは、わずかに後ろへと身を引く。

「今日が何の日か分かる？」

「は？ えっと……まさかリスカの、誕生日、とか？」

「馬鹿。違うわよ。私のはまだ三月みつきも先」

「じゃあ。オレの誕生日か？」

「……自分の誕生日覚えてないって、かなり頭の方が重症じゃない？」

「はいはい。ちなみに覚えてるからな。リスカと自分の誕生日くらい」

「当たり前でしょう」

「で、結局今日は何な訳？ 世界滅亡の日とか、びっくりな大予言とかするなよ」

「そんな馬鹿馬鹿しいこと言う訳ないでしょう。今日は」

リズムの良い会話を繰り返していた二人だったが、そこで一旦リスカが言葉を嬉しそうに溜める。

そして、

「ソラト王の生誕百五十周年記念のお祭りがある日よ！」

笑顔全開で、心から楽しそうにそう言った。のだが、

「……………。えっと、ごめん。その？ソラト王？って、誰？」

怪訝な顔をしたナユタの言葉によって、その笑みは完全にかき消されてしまったのだった。

s c e n e 6 (前書き)

投稿遅くなり、申し訳ありません；  
しかも今回短いです；

気まずそうに、遠慮がちにナユタはリスカを見上げる。深く肩を落としたリスカは、呆れたような声音でため息交じりに言葉を続けた。

「ナユタ、知らないの？ セステイナ王国の二十代目国王であるソラト王を？」

「え……。あ！ ああ、分かった思い出した。あの西方の瓦礫の街の」

「そ。セステイナ最後の王と言われる彼よ。彼の果てしない努力と限らない知力によって、セステイナはこの雲海の上の王国で最も栄えたわ。ソラト王の時代はセステイナの黄金時代と呼ばれるほどだった。けれど 百二十年前、下界の人間がセステイナに攻め込み、国は滅びてしまった。それからは私たちの住むフェイランティス王国が最も栄えていた」

リスカは過去形で言葉を終わらせ、その先を言いはしなかった。唐突に視線を泳がせ始め、口を閉ざす。

そんなリスカの姿を横目に、ナユタはリスカが言うことを躊躇った言葉の続きをあっさり口にする。

「けど今の王になってから、この国はすっかり衰退してしまった」  
きっぱりとした口調で言って退けたナユタに対し、リスカは視線をナユタに向けて目を剥き、唇の前に右手の人差指を素早くまっすぐに立てた。

リスカの反応に対し、ナユタは「別にいいだろう」といわんばかりのうんざりとした表情でリスカを見返す。

「馬鹿ナユタ！ なんてことをさらりと言ってんの。いつもあれだけ反逆罪に当たる言動は慎みなさいって言っているでしょ！ ……まあ、その言葉を思わせるようなことを言った私も悪いけど。少しは緊張感を持ちなさい」

リスカは声をひそめてナユタを咎め、眉間に険しいしわを作った。ナユタはまるで他人事であるかのようにリスカの言葉を受け流し、ひらりと右手のひらを振った。

「分かっているよ。その忠告ならもうとつくに聞きあきてる。けど言っていないと、やってられないんだよ。王が、兄貴がしたことは、一生償っても償いきれないことなんだよ。たとえその命を以て償ってもな」

「ナユタ……」

計り知れないほどの暗い闇を秘める、ナユタの紫色の瞳。妖しく、しかし鋭く閃く真剣な其の眼差しに、リスカはナユタへ声をかけることを躊躇った。

「……そっか。 たは になって、くれ のね」

声を地に落とすようなリスカの暗く重い言葉に、ぼんやりと遙か遠くを見つめていたナユタははっと視線をすぐ傍にいるリスカに向けた。

「えっ。 うん？ 何だ、リスカ」

「うっ、ううん。 何でも、ないの。 よし。 ねえ！ ところでも

ちろん、お祭り行くわよね？」

リスカは先ほどの暗い声が幻であつたかのように、笑顔全開の明るい声音でナユタに言葉をかけた。

「あつ。 ああ……。 そうだな。 言ってみるか。 その祭りはもう始まっているのか？」

「ええ。 だから、速く行くわよ！」

リスカはふふつと軽やかに笑うと、ナユタに背を向け玄関がある方へと軽やかに歩いて行った。

リスカの薄紅色の髪が壁の死角へと消えたことを確認した後、ナユタは薄く唇を開き外の空気を胸一杯に吸い込んだ。

「……さてと。 行きますか」

s c e n e 7 (前書き)

あと一話でついに砂漠の薔薇も累計百話達成です！  
こんなにも長い物語を書いたのは砂漠の薔薇が初めてです



scene 7

ナユタは一声上げた後、大きく開け放たれている観音開きの窓を静かに閉めた。窓からの光はその一瞬にして遮断され、部屋の中を照らすのは隙間だらけの壁から差し込んでくる頼りなげな光のみとなった。柔らかに身体を包む布団から固い材質の床へと着地したナユタは、寝床からは僅かに遠い部屋の隅へ置かれたタンスの前まで大股に進んだ。

「さてと」

ナユタはタンスの取っ手らしくばみに手をかけると、僅かに後ずさりながら自分の方へと棚を引いた。中身が丸出しになった棚の中には様々な色の服やズボンなどといったものが入れられており、どこにどの服があるのか一目で分かるよう丁寧にたたまれていた。

ナユタはまず、裾が長く生地が薄いフードの付いたベージュの上着と袖の短い白のシャツを取り出し、しわがよるのも気にせずそれを無造作に床へと放り投げる。さらに裾が絞られた七分丈の黒いズボンを手にすると、ワンピース状の寝巻を脱がずにそれに足を通す。腰の位置でズボンを落ちつけた後、片手でそれを押さえながら先ほど開けた場所より少し上にある小さめの棚を片手で引き、手探りで細い茶色のベルトを取り出した。しっかりとした作りのそれをズボンに通し金具で止めると、寝巻の腰辺りにクロスさせた手をかけ一気に頭を通して脱ぐ。あまり筋肉のついていない白く細い身体が露になる。ナユタは屈みこんで床から白いシャツを手に取ると頭を通して、さらに上着に手を通しつつわりと長い足で下の大きな棚を押して閉め、上着の袖をくぐりぬけてきた手でそのまま静かに小さいほうの棚を押す。

「よし。準備完了」

仄暗い部屋の中、目を細め小さく呟いたナユタは急いで玄関口へと駆けだそうとし、

「っと。忘れ物忘れ物」

ピタリと足の動きを止め、出入り口のドアからタンスのそばの壁へと素早く視線を移す。そこには、青灰色のゴーグルがついたベージュ色のキャスケットがつるされていた。

「いくら祭りに浮かれてるからって、大事なものなんだから忘れるなんて論外だぞ。全く」

自分に言い聞かせるように呟いたナユタは、さきほど服を適当に放り投げた手と同じものとは思えぬ慎重な動きでキャスケットを手に取り、丁寧な動きで頭にのせる。キャスケットのサイズはナユタの頭には大きすぎるようで、それは自然にナユタの顔を深く隠す。

「よし。もう大丈夫だな」

下がってくるキャスケットの位置を調節しつつ、ナユタは一度小さく頷く。そして、今度こそといった風に正面を向き足を前へと運ぶ。が、

「って。しまった。朝食食ってねえじゃん」

再度やれやれといった風に足を止め、視線を正面から僅かに斜めへ反らし、部屋の中央に置かれたテーブルの上へと流す。そこには色とりどりのフルーツが盛られた木編みの籠が一つだけ置かれていた。籠の中では様々な果物が微かな光を浴びて、赤や黄や橙や紫や緑といった極彩色を薄暗い中で煌びやかに放っていた。

ナユタは果物の置かれたテーブルへ近づくと、籠の中から紅玉のように美しく光り輝いている林檎を二つ取り出した。それを器用に右手だけで持ち、

「今度こそ、行くぞ」

急ぐように玄関へと向かった。

玄関の木戸を外側へと押して開け、外の眩しさに一瞬目を細めたナユタは太陽の光にその身体を晒す。

「遅い。このあたしを待たせるなんて、いい度胸してるじゃない」

扉のすぐ傍　玄関から見て右側の壁にもたれていたリス力は、少し不機嫌そうな声で冗談半分に言葉を発する。

「ごめん、ごめん」

ナユタは己の右手に視線を落とし、その手に持った林檎をリスカにそっと差し出した。

「これ、やるから許してくれ」

「やった！ ありがとうッ」

リスカは心から嬉しいという風に嬉々とした声を上げて笑い、ナユタが握っていた林檎を二つともその手中に収めた。ナユタはすっかり手ぶらになってしまった自分の右手を、まるで何が起きたのか理解できないという風に見る。しばらく見つめ、見つめ続け、やがて、

「……朝食」

ほんの少し悲しげにつぶやき、右手をぶらりと下へ垂らした。

「うん？ どうしたの、ナユタ」

「え。あ、いや。……はあ。もう、いいや」

ナユタはため息交じりに短い声をいくつかもらし、「行こう」とリスカを促した。本気でナユタが一瞬落ち込んだ理由が分からないらしいリスカは怪訝な表情で小首を傾げる。きよとんとした表情をそのままに、リスカは右手に持つ紅色の林檎にまっ白な歯で齧りついていた。

s c e n e 8 (前書き)

長らくお待たせいたしました。

これからも何かと私事が大変ですが、できるかぎり更新したいと思  
います。

絶え間なく上がる小さな子供たちの甲高い笑い声、客引きをする中年特有の野太く快活な声。騒がしいほど賑やかな、老若男女様々な雲海の住み人の明るい話し声。朝の優しい陽光の元、色鮮やかに連なるテントの群れ。甘い香り。香ばしい匂い。華やかな空気。

「す、ごい……。ここが、あの瓦礫の街……？」

「もちろんそうよ。ね、来て良かったでしょ？」

様々なものに満ち、活気と生氣に満ちた光り輝く街。その光景を眼前にしたナユタは、信じられないと言わんばかりに首をゆつくりと左右に振り、息をのんで街を見つめる。通称？瓦礫の街？と呼ばれるこの場所は、普段誰も寄りつかない。瓦礫ばかりが広がる土色の荒涼とした土地で、住み人など両手の指で数えられるほどしか住んでいない。そんな寂れた街が今は、その面影をすっかり消し去っている。

この暗黒時代には縁がないと思われていた笑顔が溢れ、皆この祭りを心の底から大いに楽しんでいるようだった。

「さっ、ナユタ。あたしたちも楽しみましょっ！」

「えっ？ あ、ちょ、いきなり、リスカ」

リスカは半ば無理やりにナユタの右手を取ると、人いきれに溢れ返った舗装もされていない道を、テントの合間をぬうようにして走り出した。

そんな、リスカに引つ張られるようにして走るナユタを見つめる者が二人。鮮やかに、煌びやかに輝く太陽の色を写し取ったかのような黄金の瞳と、その色と対になっているかのような暗く、しかし美しい、まるで夜闇のような漆黒の髪を持つ十代半ばごろの少年と少女である。顔立ちが大変似ている二人は、どうやら双子の兄妹のようだ。少年の方はやくせのあるショートヘアをしており、少

女の方はストレートのショートヘアをしている。服装は双方とも、薄い生地に複雑な刺繍の入った灰色の長そでシャツに、黒いショートパンツといういたってラフな格好をしていた。

「いたな、アズハ」「いたよ、アズリ」

二人は人ごみのはるか上。瓦礫と化した建物の屋根だったであろう場所に立っていた。独特な造りをしたセステイナの建物は屋根が平たく、しかも三分の二以上が倒壊していた。屋根の上は無論風通りが良く、二人の服は風を孕み大きく膨らんでは布のはためく音を立て、二人の艶やかな黒髪は滑らかに風の中で流れていた。

少年少女は金色の瞳で、頭に乘せたキャスケットを空いている左手で押さえながら駆けるナユタの姿を捉える。その瞳からは、およそ感情というものが全く感じられなかった。

「老様にご報告を」

少年にアズハと呼ばれた少女は、虚ろな眼差しのままゆるりと口を開きそこから言葉を零した。

「祝祭の伝説は真実だったと、老様にご報告を」

アズリと呼ばれた少年は、唇をおもむろに持ち上げて言葉を紡ぐ。太陽が二つ、色白の顔の上に浮かんでいるかのような黄金の瞳に、夏の陽光のような鋭い光を一瞬閃かながら。

「つつ、疲れた……」

リスカに振り回されるようにして祭りに参加したナユタは、身体中にのしかかる疲労に耐えきれず、道の端に設置されているベンチに人目も構わず、ぐったりと仰向けに倒れこんだ。

リスカはナユタに恐れを抱かせるほどの体力と食欲を見せ、永遠の持久力を持った渡り鳥の如く店から店へと慌ただしく移動して回った。ナユタはそれについて行くのが精一杯で、あまり祭りを堪能したとは言えない。逆にリスカは、遊びにふける子供よろしく瞳を最大級に煌めかせ、祭りを思う存分堪能していた。

そして、ナユタを引っ張り回していたリスカは、少し前にこの人

ごみの中でナユタとはぐれてしまったのだった。

「まったく。リスカ、どこ行ったんだよ。探すつつつても、この人の数だしな……」

ナユタは目の前を行き来する雲海の住み人の群れを、げんなりと見つめる。夕刻に差し掛かった今なお、高らかな笑い声と歓喜は失われず、現在は過ごしやすい気候である春だというのに辺りは逆上せそうなほど蒸し暑くなっていた。

「……うん。けどやっぱり、こういう賑わいはいいな。まるで昔のフェイランティスみたいだ」

ナユタは繁栄していたころのフェイランティスを追憶し、静かな笑みとともに遠くを見つめる。

華やいだ祭りの景色に、昔のフェイランティス王国の景色が重なる。

笑顔と喧騒に溢れる街。国の平和を立派に保ち、ナユタとともに笑顔で街の景色を眺めるナユタの父と母。そして　美しい街を冷やかな目つきで見下す、ナユタの兄。

「ッ!」

ナユタは酷い悪夢から瞬間的に目覚めたかのように、勢いよく上半身を起こした。その素早さと唐突さに、ベンチのそばを歩いていった歩行者のうちの数人が、驚きの声や小さな悲鳴を上げながら、ぎよつとした目でナユタを見る。しかしその声や反応は、ナユタの耳にも目にも届いていないらしく、周りの様子に何の反応も示さなかった。

「……チツ。何であんな奴の顔が浮かぶんだよッ」

ナユタは己へ対する瞋恚しんいの炎とともに苛立ち交じりのため息を零す。口から長く溢れたため息は、ナユタの表情を曇らせる。ナユタは鬱とした顔で自分を周りから隔離するかのようになんて膝を抱えてベンチに座る。

まるで、何か大切なものを失ってしまったかのように、ナユタは虚ろな眼差しを自分の膝頭に落とす。

「……そっか。オレは……リスカがいないと独りなのか……」

ともに住む家族も、心から信用できる親類もいない。気軽に話しかける友人も、リスカ一人しかいない。

「オレは、何て頼りないんだ……」

「なあーに、一人でブツブツ言ってるの」

突然、明るい少女の声がナユタの頭上から降って来る。ナユタははっと顔を上げ、声の上があった方向を見る。そこには、

「あ」

「?あ?じゃないわよ。それとその格好、周りから見たらかなり寂しい人に見えるわよ」

リスカ、その人がいた。

ほんのりと顔を微笑を浮かべている彼女は、両手を背中へ回し、僅かにナユタへと身体を傾けた状態で立っていた。右方向から降り



注ぐ太陽の光を浴びて艶めく桃色の髪は風に柔らかくなびき、淡く光を帯びた同色の瞳はナユタの姿をしつかりと捉える。

ナユタは何の前触れもなく現れたリスカに戸惑いながらも、僅かに顔を赤らめてそっぽを向き、口を開く。

「わっ、悪かったな、寂しそうな人で」

「別に悪いとは言つてないじゃない。そんな格好されてちゃ、こっちが泣きたくなるのよ」

顔をそらしたまま、ナユタは眉をひそめる。

「何でリスカが泣かなきゃッ！」

ふいに、ナユタの口がふさがれる。

「泣かなきゃいけないんだよ？と言おうとしたナユタは口がふさがれたことに対し、一瞬目を見開く。驚くのもつかの間、続いて口内に僅かな甘味が広がり、歯によって何か固く薄いものが砕かれた。「ごたごた五月蠅く言うのはなし。まずはそれを食べなさい。あたしがおごつてあげてるんだから、ちゃんと食べることに」

リスカは口をとがらせる。彼女が突然口の中へ浅く入れて来たものへと、ナユタはそつと手を伸ばし、そこから伸びている細い棒を掴む。そのままそれを引き、口の中から何かを取り出す。

「あ」

その手に握られていたのは、紅い光沢を帯びた直径三センチほどの大きな飴　林檎飴だった。

不思議そうに自分を見上げてくるナユタの視線をにっこりと笑顔で受け止めながら、リスカはナユタの隣へ腰を下ろす。それとともにナユタは曲げていた膝を伸ばし、裸足の足を白い地へとつける。

「ほら、朝私が林檎を貰った時に、ナユタが林檎を食べたような顔してたから、そんなに食べたいなら買って買って買ったのよ」

「え、あ……ははは。そりゃ、どうも」

あえて本当の心境は言わず、ナユタは曖昧な作り笑いを浮かべる。ナユタの手に握られる、光に反射して紅く煌めく丸いリスカが買ってくれた林檎飴は、とても甘美でそしてまるでそれが精密な飴細

工であるかのように、食べるのがもったいないと思えるほど美しく見えた。口に入れた瞬間にナユタが飴の一部を噛み砕いたため、林檎飴の表面にはうっすらと蜘蛛の巣の様な細かいひびが入っていた。

「じゃ、ありがたくいただくとするか」

ナユタは林檎飴をしばらく眺めた後、その表面に開いた口をそえた。白い歯が、真っ赤な林檎を覆う飴を砕く。ガラスの破片のように細かに砕け、口の中に甘い飴の欠片が散らばる。ナユタはさらに飴の奥にある林檎へと齧りつく。僅かな酸味が弾けるように口内全体へ広がり、飴の甘さと程よい具合に絡まりあう。

ナユタは満足げに息を小さく漏らし、口元を微かに綻ばせる。

「うん。すつごく旨いよ。ありがとう、リスカ」

「どういたしまして」

リスカは微笑みながら、林檎飴を頬張るナユタの姿を隣から見つめる。口元がべたつくのか、ナユタは林檎のように赤い舌で唇をなぞる。

「それからさ、ナユタ」

「うん？」

リスカは前方へ身体を乗り出すようにして、ナユタの顔を覗き込む。ナユタは怪訝そうな表情で、リスカの桜色をした瞳を見返す。

「ちよつと連れて行きたいところがあるんだけど……いい？」

「え？ ああ、別にいいけど。……何で？」

ナユタの問いに、リスカは一瞬視線を地へ落とし何かを考えている風だったが、

「……いいから！ それ食べたら行くよっ」

結局明確な答えを口にするとはなかった。

「うっ、うん」

ナユタはそれ以上深くは理由を問わず、話の流れのままに頷くことしかできなかった。

「老様。祝祭の伝説は、真実まことのようです」

「ソラト王復活の伝説は、真実のようです」

黒髪金眼の少年と少女　アズリとアズハは、機械的な動きで同時に頭を下げる。

「そうか。ついに、我ら一族の、復活の日が、訪れるか」

アズリとアズハが頭を下げる先　暗い部屋の中で、スポットライトのように頭上から降り注ぐ光の中心に置かれた簡素なベッドの上に、豊富な白髭しろひげをたくわえた小さな老人が身体を横たえたいた。髭とほぼ一体化しているように見える白髪の間隙から覗く目は、頭を下げる二人と同じく、黄金の太陽のように美しい金をしている。一本残らず白色をした老人の髪は、年寄りの雰囲気を出しているが、金色の瞳には老人にそぐわぬ、まるで己の目的をしっかりと見据える若者のようにまっすぐな光が浮かんでいた。

「どういたしますか、老様」

「ここへ連れて参りますか、老様」

顔を上げ、仏頂面で淡々と言葉を紡ぐ二人に対して、老人はゆるりと頷く。

「ああ、任せたぞ。儂わしは、一族の皆を、広場へ、召喚する」

「了解いたしました」

「ただちに、連れて参ります」

アズリとアズハは再度機械的に一礼し

ふいに、その姿を消した。

\*

\*

\*

「はっ、速いってば、リスカ!」

「えーっ。けど、早くしないと見られなくなっちゃうんだもの!」

「だから、一体何しに何処へ行くの?」

「それは、秘密」

二人が会話を繰り広げる中、リスカはナユタの腕を。強引に引つ張りながら、何処かへ向けて駆け抜ける。

困り果てた表情のナユタは、半ば引きずられるようにして走っていた。すっかり息は上がっており、しかしその顔には笑顔は浮かんでいないにせよ、楽しげな色がうかがえた。

「もうすぐだから。そろそろ、いいかな」

リスカはふいに笑顔で止まる。自然とナユタもその場に止まり、荒い呼吸を整えようと深呼吸を繰り返す。

二人が足を止めたのは、瓦礫の山の隙間にできた路地の様な場所。正面から太陽の光が差し込んでいるものの、両脇を瓦礫で覆われているため、やや薄暗い。そこに、生き物の気配はない。

「で、リスカ。一体、どこだよこゝ……?」

「目的地はもう少し向こうよ。はい。じゃあ、目を閉じて」

リスカはやや長い瞬きでしばらく目を閉じ、それをするよう促す。一方のナユタは、理解不能といった様子で眉をひそめていた。

「は? え、何で?」

「いいからっ。ごたごた言っでないで閉じなさい」

戸惑うナユタを急かすように、リスカは少々むっとした顔で口早に命令する。どうも腑に落ちないといった風に首を捻るナユタだっ

だが、やがてリスカの言うとおり目を閉じた。リスカは臉を下ろしたナユタの姿に満足したかのように独り頷くと、「じゃ、行くわよ。絶対にいいって言うまで目を開けちゃだめだからね」とナユタの両手を引き、今回は歩調を緩めて歩きだした。

さすがに何も見えないままに前進するというのは恐いらしく、ナユタは少し腰が引けた体勢で歩いている。リスカはナユタの足元に細心の注意を払いながら、後ろ向きで一歩一歩確実に歩いていく。

「……ま、まだ？」

「あと少し。もうちょっとだから、私を信じて進んで」

恐る恐る足を運ぶナユタの頬を、軽く風が撫でる。

「もういいわよ。はい、目を開けて」

リスカの言葉とともに、ナユタの目が開かれる。その瞳がまず捉えたのは、逆光の中で微笑むリスカ。彼女はすぐにナユタの手を放すと、横へ身体を移動させた。そして、ナユタの頬と瞳が淡い橙色を帯びる。最初はその眩しさに目を細めていたナユタだったが、次第にその景色に目を奪われ、目を大きく見開いた。

「う、わぁ……」

煌めく光を纏う、橙色に染まった雲海。白い大地の隙間から吹き上げてくる風に乗って、淡い薄紅色の花弁が飛び交う。

「ね？　すごく綺麗でしょ？」

「ああ……。何ていうか……。うん。すごく、綺麗だ……」

輝きが溢れる瞳で目の前に広がる絶景を見つめるナユタは、圧倒され言葉を失ったかのように呆然と立ちつくす。

「この花はね、桜っていうのよ。この世界にはない、下に広がる人間の世界の植物なんだ」

「へえ。人間の世界の、植物……」

「ほら。ナユタって綺麗なものが好きだから、ここの景色も気に入ってくれるかなって」

リスカは照れたようにはにかみ、背中両手を組み舞い上がる桜を見つめる。

「ああ。とつても、気に入ったよ。ありがとう、リスカ」

ナユタは景色から視線を外し、リスカを見る。リスカは太陽のよ  
うに明るく煌めく笑顔でナユタを見返す。

「良かった。私もこの景色が、この場所が、大好きなの」

リスカは愛おしそうに雲海と、桜の花弁を見つめる。ナユタはふ  
わと舞い上がる桜を一片そっと両手の平で包み込むようにして捉え  
た。そのまま右手の人差し指と親指で摘み、すっと光にかざす。

「綺麗だな。この桜っていう植物は、リスカの髪と目と同じ色をし  
てるな」

「あつ。気付いてくれた？」

リスカは桜色の瞳を煌めかせ、桜色の髪を揺らしながら桜を仰ぐ。  
「だから私、この桜っていう花が大好きなの。 私たちの世界に  
はない私の目と髪と同じ色の植物が、こうしてこの場所だけで見  
ることができる。そう考えたら、ちよつと贅沢じゃない？」

リスカは綺麗に微笑み、ナユタを見つめる。ナユタは花弁を指か  
ら離し、リスカを見つめながら頷く。

「確かに。ここには城にあつたような華美な部屋も、豪華な食事も、  
絢爛な調度品もないけど……でも、この景色はそれらよりもつと、  
何倍も何千倍も綺麗だ。それに、時々じゃなくて毎日リスカに会え  
る。しかも、王の子供と侍女という関係としてじゃなく、友人とし  
てリスカと接することができるしな」

愛おしそうに、とても大切そうに言葉を紡ぐナユタ。その口元は  
微笑んでいるが、瞳には変わらぬ憂いをたたえたまま。微笑の仮面  
を付け、己の憂いを悟られまいと無理やり笑って見せる。今のナユ  
タは、まさにそのような風に見えた。

「ナユタ……」

侍女として、友人としていつもナユタと過ごしてきたリスカは、  
ナユタの笑みは偽りなのだと簡単に悟ってしまう。彼女はその顔に  
浮かべていた微笑をふっとかき消す。

「うん？ 何だ、リスカ」

桜を見つめていたナユタは、隣に立つリスカへと視線を移動させる。紫の瞳が捉えたのは、憂いと不安と苦しみが入り混じり、絡み合っているかのような表情のリスカだった。ナユタは深い悲しみに溺れているかのような、リスカの何とも言えない表情に驚き、僅かに双眸を見開く。

「あのね、ナユタ」

「え……？ あ、うん？」

「あのね、私……。私は」

リスカは辛苦の表情で懸命に訴えるように、繊細な言葉を紡ぐ。が、その静かな声は、

「今日は、メシア様」

「ご機嫌はいかがですか、メシア様」

淡々とした感情のない声によって遮られた。



s c e n e 1 1 (後書き)

投稿が遅れて申し訳ありませんでした；w；

「誰だっ！」

ナユタは突然後方から聞こえた声に、驚愕の表情を見せながらも俊敏な動きで振り返る。言葉を遮られたリスカもナユタに続き、恐る恐る振り向く。二人の見つめる先には、

「老様がお呼びです」

「一緒に来てください」

およそ感情というものが感じられない顔をした、黒髪金眼のそっくりな顔の作りをした少年と少女が並んで立っていた。

「……あんたらは、誰だ？ 何を言ってる？」

ナユタは子供だからと言って警戒を解いたりはずせず、淡々と冷静に問う。眉をひそめたナユタの眼差しを受けた二人は、お互いに顔を見合わせる。

「間違いないな」

「間違いないわ」

二人は訝しげに自分たちを見つめるナユタとリスカの元へ、とたとと駆けるよる。その警戒心の欠片も見られない行動にナユタは戸惑い、僅かに退く。

「なっ、だから、何なんだよ？」

「えっ？ えっ？」

状況が把握できず、疑問の声を漏らすリスカは、ナユタの前へと寄って来た二人の子供を眉をひそめて見つめる。

「老様がお待ちです、メシア様」

「共に来て下さい、メシア様」

黒髪金眼の少年と少女 先程、ナユタとリスカを屋根の上から見ていたアズハとアズリは、ゆるりとナユタへと手を伸ばした。

「……は？ 救世主<sup>メシア</sup>って、オレ？」

「はい」「はい」

二人の声が綺麗に重なり、二対の太陽がナユタをまっすぐに捉える。ナユタは奥底に闇を宿した神秘的な紫の瞳を疑問と不安に揺らめかせる。

思わぬ展開に、リスカはナユタを心配げに見つめる。長年ナユタと共に過ごしてきたリスカは、瞳の闇が深くなることを瞬時に感じることができた。同時に、彼女自身の薄紅の瞳も、陰りを見せていた。

「私たちを救ってほしいのです」

「我らの繁栄の手助けをしていただきたいのです」

アズリとアズハは平坦な口調を全く変えず願いを述べ、まっすぐにナユタを見つめる。

「助けるって……このオレに、何ができるってんだ？」

ナユタは困り果てたように、自分の無力さを噛み締めるように、眉をひそめる。自分を見上げる四つの瞳には、懇願するような感情も読み取れなかった。

「もし助けて下さるならば、私たちについてきて下さい」

「老様の元へ、お連れします」

「質問は無視かよ……。っていうか、その“ろうさま”って誰だよ？」

ナユタの頭の中は困惑と疑問ばかりに埋めつされ、そしてその疑問に答えられるのは目の前に立つ少年と少女のみ。二人は視線をそらさず、ナユタの瞳だけを見つめる。

「老様は、我らの長です」

「老様は、ソラト王様の忠実なる家臣であられた方です」

ナユタは驚愕と疑念に、眉間のしわをさらに深くする。

「ちょっと待て。ソラト王の家臣って……ソラト王が死んだのは百二十年前だろ？ 空の民の平均寿命はおよそ六十三歳だ。ってことは、その老様ってのは寿命の約二倍も生きてるってことじゃないか。そんなこと、信じられない」

ナユタは眉間にしわを刻んだまま、首を横に振る。そのとき、ナ

ユタの後ろで耳を傾けていたリスカがはっと何かに気付いたかのよう  
うに首をはね上げた。

「もしかして……！」 黒髪金眼つて、あなたたち、まさかこの空の  
世界の先住民……？」

s c e n e 1 2 (後書き)

毎回お待たせして申し訳ありません；

リスカの思いがけない言葉に、ナユタは双眸を見開き驚愕を露わにし、まさかと言わんばかりに首を振る。

「ありえねえだろ。だって、この世界の先住民は 百二十年前の戦乱の中でほぼ死んで、その後、完全に全滅したはずだろ？」

「いいえ。違うのです」

「私たちは、生きています」

黒髪金眼の二人の子供、アズハとアズリはナユタの言葉を静かに否定する。その反応に、ナユタの困惑はさらに深くなる。

訝しげに眉をひそめながら、ナユタは二人に問いかける。

「じゃあ、この世界の先住民が生きていて、お前らもその生き残りで……何故、オレに助けを求める？」

「伝説だからです」

「救世主メシヤが現れるという」

「……は？ 伝説？」

間の抜けたナユタの声に、アズハとアズリは無表情のまま同時に首肯する。

「私たちを救うのは」

「ソラト王に瓜二つの、紫の瞳の子」

「……はい？ えっと……」

ナユタは理解しがたいといった様子で二人を交互に見つめる。

「伝説にそう記されているのです」

「あなたはソラト王に瓜二つなのです」

「……………。はい？ え？ ちょっと待て。オレとソラト王が似てる？ それで、オレに救世主になれと？ 意味分かんねえんだけど？」

未だに事情を理解できずにいるナユタは、混乱する頭を抱え、眉をひそめる。そんなナユタの困惑を目の当たりにしてなお、まるで

その表情しか知らないといわんばかりに、二人の少年と少女の顔は無表情のままだ。

「ついでてきてください」

「そうしていただければ、詳しい説明をします」

「……って、言われてもな」

ナユタは困惑顔のまま、背後に隠れるように立っているリスカを肩越しに振り返る。リスカはリスカで何やら深く考え込んでいるようで、眉間に小さなしわが刻まれ、日本の細い腕が胸の下で組まれていた。

ナユタは小さな吐息やうめき声を漏らしつつ、逡巡し、やがて自分を無感情に見つめる二人の瞳をじっと交互に見詰める。

「とりあえず、オレに何をしてほしいのか、概要だけでもいいから教えてくれないか？ お前たちは、何故助けを求めるのか、何から救ってほしいのか、そもそも伝説って何だ？」

ナユタの問いに対し、アズハとアズリは二人同時にお互いの顔を一瞬見合わせた。やがてナユタに向き直ると、再び交互に口を開き始める。

「私たちは、一族絶滅の危機に晒されています」

「それだけは、ダメなのです」

「私たちの歴史が」

「我らの伝説が」

「私たちの言い伝えが」

「途切れることは、あつてはいけません」

最後の言葉を二人で共に言い、少年と少女は言葉を止める。

「……ということとは？」

ナユタはいまいちわからず、再び問う。

「そもそも私たちが住む」

「人間の住む下界から切り離された空間の世界」

「人間たちは？ 天空の理想郷ユートピアと呼ぶこの世界の祖先は」

「もともと、特別な存在などではなく」

「人間なのです」



s c e n e 1 4 (前書き)

毎度不定期更新申し訳ないです…；

「！！」「そんなっ……！！」

自分の方が遙かに長く生きているように見える、幼い者の口から語られたことに対し、ナユタは目を睜り、リスカは息をのむ。

二人の反応などお構いなしに、アズハとアズリは話を続ける。

「我らは遠い昔、奇妙な力を持つ者として忌み嫌われ、能力のない人間から迫害を受けたのです」

「私たちは己の力を駆使し、この空間に雲と疑似した地を創り、空に似た天を創造し、そこへ太陽の様な光を浮かばせ、この世界を生み出したのです」

相変わらず無表情ではあるが、二人は確実に言葉数を増やしていた。

衝撃の告白に、ナユタもリスカもただ呆然と話に耳を傾ける。

「やがて、この世界に住む我々を殲滅すべく、人間が乗り込んできたのです」

「ほとんどの者は殺されました」

「しかし、一部の者が襲撃を耐え、生き残りました」

「残念ながら、その中でソラト王様は命を落とされました」

「生き残りの中で、ある者は奴隷として地上へ連れて行かれ、ある者は人間が地上へ帰るまで目につかぬようひっそりと暮らしていました」

「しかしある時、先住民である一人の女が人間の男に恋をし、二人は結ばれてしまったのです」

「女は地上の人間の子を孕み、やがて純粋な我らの血を受け継ぐ者は、少数になってしまいました」

「あなた方は地上の人間とこの雲海に住む人間の混血です」

「我ら先住民の血を濃く受け継ぐ者は金の髪と黒の瞳を持たずとも、不可思議な力を使うことが出来ます」

「また、地上へ連れて行かれた人々も、奴隷を禁ずる法の制定や発展とともに自由の身となり、地上で普通の暮らしを送り始めました」「地にすむ我ら一族の者の血をひく能力者のことを、地上の人間は？神の愛娘？と呼んでいるそうです」

二人の長い話に区切りがつく。聞き終え、長く息を吐き出したナユタは、嘲笑とともに吐き捨てるように呟く。

「迫害をしたつていうのに、今じゃ神扱いかよ……」

ナユタは複雑な感情に眉をひそめ、リスカは俯きながら悲しげに首を振る。

二人の様子を眺めつつ、アズハとアズリは頭を下げる。

「どうか、我らを守ってください」

「あなた方の住むフェイランティス王国の王が現在の方になってから、それまで支給されていた食料も届かなくなり、今では子供たちが食物を育て、それを糧にどうにか生きている状態なのです」

「このままでは、我らは全滅してしまいます」

「今のフェイランティスの王を、どうにかしていただきたいのです」

「なん、だと？」

自分の兄である王の話聞き、ナユタの様子が豹変する。怒りと憎しみと悲しみと心の闇がない交ぜになった色に瞳は染まり、どこを睨むでもなく遠くへナユタは鋭い視線を投げる。

不安げなりスカが声をかけるよりも早く、ナユタは黒髪金眼の少女に大きく頷いていた。

「その願い、オレが引き受けよう。その、老様とかいう人の元へオレを連れて行ってくれ」

二人の子は、ナユタの言葉にさして驚くでも喜ぶでもなく、無表情のまま再度頭を下げる。が先程に比べ、数ミリほどその脛は見開かれていた。しかし、その状況を歓迎しない人物が一人。

「ちよ、ちよっと待ってナユタ！ どんな危険があるのか分からないのに承知していいの？」

ナユタの言葉に、不安のどん底へ突き落とされたような感覚に捉

われたリスカは、焦燥に声を荒げる。

「いいんだよ、リスカ。オレは やっと、復讐が遂げられるかもしれないんだ。今の王が死ねば、この子たちの願いも叶う！」

ナユタは言い、そして とても、これ以上ないほど楽しみに、あるいは愉快そうに、あるいは滑稽に、高く高く笑い声を虚空へと響かせた。

\* \* \*

「到着です」「着きました」

瓦礫の海の中、幼い二人に導かれてたどり着いた場所は、半ば瓦礫に埋もれている小さな穴の前だった。

「ここ、なのか？」

二人の案内通りに歩いてきたナユタは、瓦礫をくり抜いたような暗い穴を指し示す。凹凸が多く歩きづらい道のものであったために、ナユタの息が上がっていた。反対に、少年少女は息一つ、表情一つ変えていない。一人でアズリとアズ八についてきたナユタは、僅かに赤く色づいた顔で二人の子供と穴を見つめる。

部外者を通すわけにはいかないと二人は頑なに首を横に振り、リスカとは先程の場所で別れている。ナユタを一人で行かせることは出来ない、自分もついて行くとしばらくの間言い張ったりリスカだったが、アズリとアズ八の威圧的ともとれる口調と表情に折れるしかなかった。

穴の前に立つ二人はこくりと首だけを下げ、

「穴からお入りください、我らは下で待っています」「では、お先に失礼します」

ナユタを同時に一瞥すると、唐突に姿を消した。

「なっ!？」

ナユタは目を丸くする。まるで霧のように、二人は跡形もなく消えてしまった。

「下で待つてると言ってたが……」

ナユタはまじまじと穴を見つめながら、眉をひそめる。が、とりあえずといった風に身をかがめ、穴をくぐる。細身のナユタが通る

のさえギリギリのサイズだ。

闇に沈んだ穴の中へと身を投じる。と思いきや、穴の中はさきほどと打って変わって明るく、両脇の石壁に火が灯されていた。

ナユタは再び驚きに目を見開き、口をぽかんと開ける。中の構造をよく観察してみると、ナユタが今立っているのは穴より横幅がやや広くなった下りの階段で、その両側の壁にはいくつもの松明が掲げられていた。ナユタは赤々と踊る美しい焔に目を奪われ、呆然と動きを止める。

「いつの間に点いたんだろう……。どんな仕掛けになってるんだ？」  
「仕掛けも何も、それは私の力よ」

周りの炎を見渡していたナユタの問いに対して、女性の声が返ってくる。

はつと視線を階下へ下げたナユタの視線の先。そこには、石で造られた頑丈な階段に腰掛け、ナユタを仰ぐ一人の女性がいた。女性はアズリとアズハと同じく、黒髪金眼を持っている。

「こんにちは、メシア様。私はあなたの案内役を務めるニチカよ」  
「あ、こんにちは。オレはナユタ、といいます」

ナユタはやや表情を固くし、屈めていた背筋を伸ばす。穴とは比べ物にならないほど中は広く、最上の段で立っても頭をぶつけない程度の高さはあった。

緊張の面持ちをしたナユタを見、ニチカと名乗った女性は唐突に吹きだすと、けらけら笑い出した。

「敬語なんて使わないで。それから、肩の力を抜いて頂戴」

「え、あ、すみません。年上の人だと、つい……」

「良い心がけだけれど、私には気楽に話してくれて大丈夫よ。大切な救世主様なんだもの。私が敬語を使わなきゃいけないくらいだわ」  
ふふふと肩を揺すりながら、太陽のように美しい瞳を輝かせて楽しげにニチカは笑う。

「そう、なんです……なんだ」

ナユタはやや身体の力を抜き、大きく息をつく。微笑みを浮かべ

たニチカは立ち上がり、上の段に立つナユタを手招く。

「なかなか可愛いメシア様ね。私、気に入っちゃった」

「あ、え……うん。ありが、とう?」

曖昧な答えと共に語尾を上げ、ナユタは困ったように笑う。

「さて、ついていらっしやい。老様のもとへ案内するわ」

「はいっ」

ナユタは慌てて、しかし一段一段踏み外さないように気をつけながら階段を下りる。

決意を秘めたナユタの瞳は松明の炎に閃き、神秘的に、しかし強く輝いていた。

階下には、やはり石造りの真つ暗な通路が続く。

階段を下りきったナユタは、二チカの隣へ並んだ。同時に、二チカは左の手の平を自分の口の前へと持つていき、手の上に載せられた物をそつと吹き飛ばすように息を吐く。すると、

「わっ。すごい……」

闇に閉ざされていた廊下に火が灯った。二人の正面に広がる洞窟の様な通路にも、階段と同じく壁に松明が掲げられており、その松明に次々と火が灯っていったのだ。

「これは、二チカさんの能力、なのか？」

「ええ、もちろんそうよ」

二チカは小柄なナユタを見下ろしながら、右手の親指と中指をはじき、音を鳴らす。すると、二人の背後で階段を照らしていた松明が、瞬時に消え去った。

「へえ……。二チカさんは、火を操れるのか」

「そうよ。私は思いのままに火を生み出し、同じく消すことが出来る。まあ、操れるのは私が点けたものだけなんだけどね。私たち先住民は、全員能力者だって、双子のアズリとアズハから聞かなかつた？」

「え？ …… ああ、あの二人はアズリとアズハっていうのか」

ナユタの呟きに、二チカは目を丸くする。

「驚いた。あの子たち、名前も名乗ってなかったのね。全く……。男の子の方がアズハ、女の子の方がアズリよ。本当に躰がなっていないわ」

「あつ、けど、二人ともちゃんと敬語使えてたし、礼儀正しかったし、全然躰がなっていないことは無いと思うんだけど」

ナユタは二人の弁明をするように、慌てて言葉を紡ぐ。猛烈な勢いで両手を振るナユタを見ながら、二チカはくすりと笑い声を漏ら



した。

「自分の発言のせいであの子たちが責められてると思った？」

「え？ あ、まあ……」

「優しいのね。さすがメシア様」

少しおどけたようにニチカは笑う。そんな彼女につられるようにして、ナユタも少しだけ口元を緩めた。が、すぐに口の端を結ぶ。

「けど……、あの二人には少し感情が足りないような気がする。最初、先住民の人は皆あんな風なのかと思ってたけど、ニチカさんは全然違うよな」

神秘的なナユタの表情に対し、ニチカは小さく吹きだす。

「皆アズハとアズリみたいだったら怖すぎるわよ。違うわ。……あの子たちはね、ちょっと、訳ありでね」

「その訳、聞いても大丈夫か？」

先程まで浮かべていた灯のように明るい表情を陰らせ、ニチカは憂いの笑みを湛える。瞳の闇を払拭しきれないまま、彼女は遠い目で虚空を見つめる。

「ええ。……率直に言うと、あの子たちには両親がいないのよ」

ニチカの口から零れた言葉に、ナユタは目を見開き言葉を失う。その脳裏に、昔日の自分の姿が鮮やかに浮かび上がった。

「だから、私たちの住むこの地下世界の住民たちに、二人は育てられたの。もちろん、私もあの子たちを育てた中の一人よ」

俯き、乾いた声で語るニチカは一旦言葉を止め、息を吸い込む。

ナユタは苦しげな眼差しで遠慮がちに彼女を見上げ、静かに言葉の続きを待つ。

「……二人の両親は、あの子たちを産んですぐ、とある事故に、巻き込まれてしまったの」

「事故……？」

「そう。約二十人が巻き込まれ、そして全員が消息を眩ませた土砂崩れよ。ここは地下で上は瓦礫だらけだから、壁が崩れてしまったら一気に土砂が流れ落ちてくるの。それに巻き込まれて、二人の両

親は……」

二チ力は言葉を喉に詰まらせ、それ以上は言えないと示唆するように、瞼を伏せて力なく首を振る。ナユタは気付かぬ間に止めていた息をふつと吐き出し、

「そう、だったのか」

俯くと、それ以上は何も言わなかった。

二人の足音だけが、冷たく硬質な音を響かせ沈黙の邪魔をする。

「ごめんね。空気悪くなるような話しちゃって」

静寂に包まれた空気に波紋を広げた二チ力は、ナユタへ向けて申し訳なさそうに笑みを浮かべる。彼女の表情にナユタは慌てて首を振り、言葉を紡ぐ。

「あ、いや、いいんだ。話振ったのはオレだし」

「そう。やっぱり、メシア様は優しいわ。本当に　あなたにこんな役目を負わせるのは、辛いわね」

低く微かな二チ力の声に、ナユタは小首を傾げる。

「うん？　何か言ったか？」

「……いえ、何でもなしの。さあ、老様の元へ急ぎましょう」

陰鬱な暗い瞳で二チ力はコケティッシュな笑みをそつと浮かべ、ナユタを促した。

s c e n e 1 6 (後書き)

えっと、お久しぶりです。

かなり長い間放置してしまい、申し訳ありませんでした；

ついこの間、二月から書いていた a c t 3 が完結しましたので、  
こちらも少しずつ投稿しなければと思ひまして。

これからは少しでも連載速度を上げます……と、あれ毎回同じよう  
なことを言っている希ガス（）

ニチ力の言葉を最後に会話が途切れ、二人は黙したまま通路を進む。沈黙をどう打ち破ろうかと口を閉ざしたまま思案していたナユタだったが、幸いそれほど長く悩む必要は無かった。

「……あ。ほら、見えて来たわ」

「え？」

明るくやや弾んだニチ力の声に、ナユタは自分の爪先へ落としていた視線をふつと上げる。

二人の十数メートル先には、ひときわ明るく開けた場所が広がっていた。そこには数人の人影が佇んでおり、深い知性と冷静さを映し出した黒の瞳で、二人を静かに見つめている。

「あれ、全員が先住民なのか？」

「そう。全員が私と同じ、先住民よ」

「へえ。こんなにたくさんいたなんて……」

数にして約三十人ほど。群衆にしては少ないが、先住民が生き残っていることを数分前まで知らなかったナユタにとっては、十分に多い数だった。

「前はもつといたんだけどね。今はこの人たちと私と老様だけしかないわ。その中で十代半ば以下の子供は、あの双子だけ。赤ん坊が産まれても、生きていくには環境が厳しいのよ」

「……そう、か」

先住民の現状をまざまざと知ったナユタは、悲壮の面持ちで一度深呼吸する。薄く開いた口から緩やかに息を吐き出し切ると同時に、先住民たちの元へ二人が到着する。

ニチ力は一度、視線をナユタに送ると足を止めた。ナユタもそれに従い、その場で歩みを止める。幾つもの黒い瞳から視線を浴びながら、ニチ力は一步前へ歩み出る。

「我らのメシア様が、ご到着なされた」

ニチ力は晴れやかとも言える言葉と共に、その場がにわかにも色めく。そこからナユタに対する期待の言葉や案内人のニチ力をねぎらう声上がる中、ニチ力は視線を巡らせ眉をひそめる。

「あら。アズハとアズリがいると思っただけど……いないわね？」  
「双子なら、もう老様の元へ参りましたよ」

どこからか、幼さを残すソプラノの声上がる。先住民たちの群れを掻き分けながら進んできた声の主は、煌めく金髪を二つに束ねた少女だった。ニチ力は彼女に笑みを向け、優しく声をかける。

「そう。ありがとうね、ミュウ」

ニチ力の前まで歩み出て来た一人の少女、ミュウはにこりと満面の笑みを浮かべると、ニチ力とナユタへ丁寧に腰を折る。

彼女はまさに清楚可憐という言葉が似合う、十六歳ほどの少女だった。

「どういたしました。そしてメシア様、私たちの願いを聞き入れて下さり、誠にありがとうございます」

同い年ほどの少女に懇懇な態度を取られ、ナユタは目を白黒させながら面食らう。

顔を上げたミュウはナユタの右手を両腕で祈るように握った。その眼差しは真剣であり、懇願するかのように濡れていた。

「どうか、私たちを救ってください。私たちに自由を、希望を運んでください」

「あ、ああ。大丈夫だ、約束する」

戸惑いを隠しきれぬまま、揺らめくミュウの瞳を真っ直ぐに見返すナユタは、何度もしつかりと頷く。その仕草を確認したミュウは、ぱっと表情を明るくした。

「どうか救世主様に、幸多からんことを」

ミュウは長い睫毛に縁取られた瞼を伏せ、そつと呟く。その祈りにも似た言葉に、二人を見つめていたニチ力は微笑み、未だ手を握られているナユタの耳元へ口を寄せる。

「ミュウには、他人に幸せを与える力があるのよ。だから、メシア

様に幸せが訪れたなら、それはミユウのお陰だからね」

小さな彼女の説明に、ナユタは少し驚いたようにミユウを見つめる。視線を上げた彼女の瞳を見すえるナユタは、やがてふっと口元を緩めた。

「ありがとう、ミユウちゃん」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7131p/>

---

act 3 夢幻の願い、偽りの微笑

2011年9月30日03時23分発行